

令和三年一月二十八日（木）
第四八五回教化高等講習会

（浄土宗宗務庁京都三階講堂Zoom）

テーマ：「仏教における『苦』について」

講題：「大学生における苦の受け止めについて」

知恩院浄土宗学研究所研究員

中御門敬教

【講義概要】

仏教の開祖である釈尊は「対機説法」を旨として、苦の衆生に接したという。

苦の代表としては生老病死の四苦、そしてそれに怨憎会苦（嫌な人と会う苦しみ）、愛別離苦（大切な人と別れる苦しみ）、求不得苦（欲しいものが手に入らない苦しみ）、五蘊盛苦（人生苦）を加えた八苦がある。実に多様な現実の苦しみを知り、それを認めて、受け入れた点に釈尊にはじまる仏教の特徴がある。

現代に生きる仏教者もその釈尊の姿勢に則って、教化活動を行うことが大切なのでなからうか。

今回はそうした視点にのっとして、「大学生が感じる苦しみ」を、特に「コロナ禍での苦しみ」に焦点をあてて紹介する。

そしてそれをもって、「寺院活動」に

「教活動」の際の、一助となることを願うものである。

掲載資料は、以下の授業中に記述して頂いたものである。

① 花園大学

令和二年度「仏教の戒律」（約四十名対象）

② 佛教大学

令和二年度秋学期「アジア仏教史」（約四十名対象）

③ 佛教大学通信教育課程

令和二年度「ブツダの思想」（約七十名対象）

なお掲載に際して、個人の特定に繋がるものは削除、もしくは修正した。

統計をとって数値化を目指すものではない点をお断りしておく。

【資料】

① 花園大学

令和二年度「仏教の戒律」(約四十名対象)

「コロナウィルス感染症のため、オンライン授業であった春学期の「日常生活」の中で、しんどかった(苦しかった)ことは何ですか。差し障りのない程度で答えて下さい。」

1 自分は外に出て運動するのが好きです。特にバスケットが好きなのですが、体育館やグラウンドが閉鎖されており、毎日が退屈でした。

2 自分は地方から来ているので周りに同じ大学の学生がいなかったのが苦しかった。一緒に授業を受けていると思えば、頑張ろうと思えるのですが、オンラインは周りに人がいない。ケータイを見ているだけ。見るのも眼が痛くなる。疲れが対面よりある。ストレス。実家に帰るときも、親に心配をかけてしまう形になった。京都は感染している方が増えてきて、大阪はもっといて、帰る時に大阪を通るのが怖い。怖いというのは、自分が地元ウィルスを持って帰ってしまうということ。何はともあれ対面は楽しい。

3 実家でオンライン座禅、朝課をしておりました。その中でもZoomを使

ったオンライン朝課は音割れなどがひどくてお経が読みづらかった。オンライン座禅では、少しでも電波やインターネット状況が悪いと止まってしまう不便でした。

4 もとより引きこもり体質で、外での遊びや外食などが好きではなくてつらい、といったことは少なかったが、京都から実家へ帰ることが、周りの目もありできず、長い間、帰省できず、家族に会うことができなかったのがつらかった。

5 学校に来ないと、一限目が何時から何時までで、二限が何時から何時という考えが難しく、時間を間違えたり、遅れたりすることが多々あって。

6 県外にでた後に数週間の自粛期間があり、外に出られなかったこと。周りからコロナウィルスを持ってきているのではないかと疑われたこと。

7 実家では気力が乏しく、課題を満足にこなせなかった。通常授業を普通に受けていればなかったはずの落単があった。

8 対面で直接的に課題ではないため、知らず知らずのうちに課題が出ていた。ということや、生活リズムが乱れ、いざ大学が始まるとしんどかったです。

9. オンライン授業は目が痛くなる。ストレスです。京都から地元に戻ると、皆の視線が気になってしまいました。
10. 勉強が身に入らなかったです。
11. 家でだらだら過ごす毎日がつらかった。
12. 外に出ることが少なく、つまらない。
13. PC操作が難しい。間違えてポタンを押してしまい、誤送信するなどトラブルが多々ありました。
14. 暇。同じことの繰り返し。ストレス。
15. 通信量が増えてしまった。
16. コロナに感染するかもしれない。怖かった。
17. オンラインで文字しか見ていないので、自分の理解度はわからなかった。
18. 初めは楽で良かったけど、後で暇すぎてしんどかった。
19. 家から出られずしんどかった。
20. 知り合いも、友人もない所で、ひきこもってしんどかった。
21. 時間の感覚がなくなってしんどかった。
22. メールなどでの通知では印象に残りにくく、忘れてしまうこともあった。
23. 就職活動です。コロナの影響で選べる道が少なくなったり、就職の方法や、面接のやり方が全て変わったので、すごく大変だった。
24. コロナ感染を疑われたこと。
25. 通常授業ならば取れていたのに、オンラインのために落単した。
26. 実家が田舎のため、コロナにかかる隣の町や村まで噂になる。しんどい。
27. ネット環境の調整がしんどかった。
28. 友達とあえない。
29. 幸い、自宅でインターネットが使えたので、特に困ったことはなかった。
30. 仕事以外の人との繋がりが希薄になり、心がすさむ思いをした。普段から寺に遊びに来てくれる子供たちに普段通り接することができなかったり、信者さんや檀家さんとのつながりが希薄になる（主に法事や食事が減る）ことで、支障がでたこと。
31. パソコンが苦手なので困った。
32. 課題がたくさんあってしんどかった。

33. レポートを出し忘れてしまった。

② 佛教大学

令和二年度秋学期「アジア仏教史」

(約四十名対象)

34. 大学に入れなかったため、卒論が進まなかった。

35. 何週間も人と話せなかった。

36. 大学に行きたいのにいけなかった。

「春学期のオンライン授業中、しんどかったこと(苦しかった)ことは何ですか。差し障りのない程度で答えて下さい。」

37. 規制される世の中の生き方に慣れなかった。

38. 勉強の進度がわからなかった。

1. 春学期はすべての履修科目がオンライン上だったこともあり、レジュメなどが配信されたものの、どの点か、どの文が重要であるのか理解できず、だからといって質問もしづらい雰囲気だったこともあり、全て単位はとれたものの微妙な評価もあった。友達にも、この内容はどういった意味か、と聞けなかった。SMS上でしか話せず、なかなかコミュニケーションがとれなかった。

2. インターネット提出の仕組みの理解。

3. パソコンのミニの調子が悪かったりして、授業をしつかりと受けることができなかった。またマスクをして人と会う状況が慣れずに大変だった。

4. 画面を長時間みてしんどかった。計画的に学習を進めることに苦労した。

5. パソコンがあまり得意ではないのに、課題も、授業もすべてパソコンで行うことが大変でした。また課題

をため込んでしまうほうなので、対面よりも課題に苦しめられました。

6. 課題が毎週いっぱいでした。課題が毎週いっぱいでした。

7. レポートを出し忘れてしまったのが、一番苦しかった。

8. 不得意だったパソコンを授業出席のため用いる必要があったこと。半年、自宅にいないといけなかったこと。

9. トラブルが多く、授業の進みに影響ができたこと。

10. 大学に入れなかったので卒論がなかなかすすめることができなかった。

11. パソコンや、 구글클래스ルームの使い方が難しかった。一人暮らしなので、知っている人となかなか会えずに大変でした。慣れないパソコンを使って、課題に毎日追われていたこと。

12. 大学に行けなかったこと。

13. 質問を的確にできなかったこと。入門や初級の講義が多かったので、基礎となる致知識が得られなかった。

14. 電子機器が得意なほうではなく、メールを見忘れてしまった。課題提出

に苦勞した。

15. 人と会えなかったこと。規制された世の中での生き方になれなかった。

16. 勉強の進め具体がわからなかった。課題だらけ。

17. オンライン授業になり一人の時間が増えたことが苦しかった。一人になるといろいろなことを考え込む性格なので、可能な限り人と会って勉強をしたかった。動画付きの授業をうけたかった。

18. レジューメ、データだけの授業では、解説がなく、常に疑問を抱えていました。

19. 家のネット回線が強くなく、ストレスを感じることもあった。

20. 毎回の解題や、アプリを開いて課題を見るのがしんどかった。

21. 課題が多く、ひたすらこなす毎日で気が滅入りそうだった。

22. 大学の人と会えなかったこと。授業で困ったことがあったとき、気軽似友人に聞けなかったこと。

23. 家で過ごす事が多くなり、人と話せず、しんどかった。ニュースを見てコロナばかりで、いつ収まるのだろうかかと憂鬱だった。

24. パソコンのネットワークの故障で接続出来なかった。友達ができるか不安だった。

25. パソコンの操作が難しい。

26. 外出の際に人の眼が気になってしまった。他県ナンバーを見ると嫌な気持ちになってしまった。今回のコロナ騒動で自分がどれだけ他人を差別しているかを思い知らされ、自身の心の醜さに気づかされました。

27. 課題が多い。

28. 大学生活を楽しみにしていたのに、家に引きこもり、課題だけを提出する日々が続いたのがしんどかった。

29. オンライン授業では、質問ができずに、理解するのに時間が掛かってしまった。

30. 本来の大学生としての生活をおくれずにしんどかった。

31. 電波が弱くなり、聞き取れなくなつた。

32. 友達と会えない、対面のほうが分かりやすい、時間に余裕があって課題のやる気がでない。

33. パソコンで眼が疲れる。

③ 佛教大学通信教育

令和二年度「ブツダの思想」（約七十名対象）

「コロナ禍での苦しみをさしつかえない程度でお知らせください。」

一 外出先ではマスクをずっとしなければならぬのがしんどいです。相手の顔や表情が見えずに会話をするのはなんだか虚しいです。

2. 型コロナウイルス感染拡大防止新のため、楽しみにしていたアーティストのライブがなくなったり、芸人さんの舞台がオンライン配信になつてしまつたりして残念でした。また、マスクをしたり家に引きこもりがちになつたりするため、何かをしたり考えたりする、人間の活力（エネルギー）がわきにくくなっている気がします。そのため、時間があるのに何もしていない自分に苛立ちます。何よりも、終わりが見えないことがこんなにも苦しいということを実感しました。

3. 私は通院のため月に一度実家に帰らなければならず、県を跨いだ移動を余儀なくされていた。コロナ禍でも変わらず、緊急事態宣言が出されている間は家族が車を往復走らせてくれた。周りが自粛や帰省を控えている中移動しなければならぬこと、両親に迷惑をかけてしまった

ことが一番苦しいと感じた。

4. 私は来年の一月の成人式と同窓会に参加できないことがとても残念です。また、就職するまでに日本国内はもちろん海外旅行をして知識・経験を得たかったので今の状況がいつまで続くのかと思ひ悩んでいます。

5. 親族や友人と会うことが制限され、対面してコミュニケーションが取れないことが苦しい。また、大学の授業（スクーリング）を対面式で行えないことが悲しい。

6. 自分はじっとしているよりも、動いているほうが生にあって人間なので、コロナウイルスによって外出自粛や密を避けなさいなどは、はっきり言ってつらかったです。山や公園に行けないのが苦痛です。

7. 世界的規模で拡大し、死の恐怖を余儀なくされ得る感染症であるので、誰もが感染の恐怖と戦っている。それ以上の恐怖が、コロナ禍での他者への誹謗中傷から感じられた。恐怖に駆られると、人間は理性や教養、建て前や思いやり、冷静さを欠くことに衝撃を受けた。この誹謗中傷の感情は、本当に殆どの人間に当てはまる感情であったと思う。むしろ、感染症に掛かりたくない、という多くの人間ではなく、感染症に掛かった、若しくは疑いのある人間こそが、

覚りの境地によって、誹謗中傷からのダメージを癒せるのではないか、と思った。この度、この大学において、そして、このタイピングで「ブツダと法然」を学んだ故に、ブツダの言う、覚りへの境地は、必要であると個人的に思った。

8. 人と会える機会が少なくなった苦しみやマスクの息苦しさなどがあります。

9. 自分の楽しみにしていたライブやイベントがすべて中止になり、一年の自分の楽しみがすべて奪われ何のために頑張って勉強して、バイトしているのかわからなくなった。一年間の自分の頑張ろうと思わせてくれるものをすべて奪われたのが一番つらかった。

10. 私はコロナ禍以前より、夏の暑い時期を除いて、外出する際はマスクを着けるのが習慣でしたが、コロナ流行後はマスクがどこにも売っておらず、ようやく見つけてネット通販で購入してみたら、粗悪品で使えるような品質ではありませんでした。今まで当たり前のように品質の良いマスクが妥当な価格で手に入っていた事への有難みを感じると同時に、マスクが簡単に手に入らないという苦しい気持ちが入み上げました。もっと苦しんでいる人がいると思うので、私の苦しみなど小さいものですが、コロナ禍によって将来

のことなどを真剣に考えるきっかけになりました。日々の苦しみの中から、小さな幸せを見つけて生きていければと思う今日この頃です。

12. 今、世界中は新型コロナウイルスの影響で、経済的困難と自殺者が増えている。私自身も高齢の母に会えなくなったりとても苦しい思いを抱えながら生きている。しかし、皆、同じ状態であるし、我慢しなければいけないと思いつつ日々、生きている。大学の授業もお金を払えるのがやつとで、来年はどうしようかと考えている。コロナのせいで思うように生きられないのが苦しい。皆が相談できない、社会にも問題があるのではないだろうか。なんとかして、社会全体で協力し合い、コロナを乗り越えて、一人でも、命を助けられるように、活動する方法はないのだろうかと日々考えている。

12. コロナ禍で大変に感じたこととして、コロナ禍でお客様が減り、従業員に支払う給料が毎月払えるのだろうかと、とても心配した一年であった。現在は少しではあるがもち直したとは言え、常に不安定である為、心休まる事が無い。しかし唯一の楽しみが仏教大学のリモート授業である。特に仏教に関しての授業は自分を振り返るいい機会にもなり、今コロナ禍で悶々としていた自分の気持ちを切り替えるきっかけになった。またリモート授業で初めて大

学の生徒の皆さんと喋る授業あり、少し不安が解消された。しかし、一月に対面授業があるが、仕事の関係で規制がかかり行けるかどうか不安である。今までは全国に仕事で飛びまわっていた事が嘘のようである。コロナ禍で仕事が一変してしましたが、従業員がいる以上気を引き締めて新たな策も考えながら取り組む努力をする。『ダンマパダ』の教えを思い出しながら。

13. コロナの影響で職場で、手洗い、マスク着用、消毒、換気、を注意しています。食事会や、忘年会もなくなり、不要不急の外出を控えるように言われます。早くコロナが終息することを願います。周りの皆さんの健康をお祈りします。

14. 私自身がコロナウイルスの影響で感じている苦しみは、なかなか気軽に外にできることができないことです。小さな息子がいるため、外に出て遊んだり思い出づくりに色々な場所に出掛けたいという思いがあります。がなかなか難しいのが現実です。子どもも私自身も家の中にいることが増えて気分転換の機会が減っているので、苦しく感じている点です。他にも、食料品や日用品の買い物も今までであれば必要になればこまめに買いに出かけるということが多かったです。今はある程度買い出し感覚でまとめて多めに買って買い物の回数を減らすよ

うに心がけてもいます。また、実際忙しくご飯が用意できない際などに近所の飲食店を利用することがありますが、コロナウイルス流行前と今とでは圧倒的にお客さんの数が少ない様子などを目の当たりにすると、胸が痛むということもあります。

15. 様々なイベントが中止になり、楽しいと思えることがほとんどなかった。

16. マスクをしていなかったら、周りの目が気になる。

17. 家で過ごす時間が圧倒的に増えた。

18. コロナ禍において失ったものも多かったが、得たものもあった。その中でもストレスという問題が社会全体で浮き彫りになったと考える。私自身ストレスも多く次の事を挙げる。国が自粛せよと呼びかけ、当初は指示に従っていたが今ではGOTOも始まり出かける人が多くなり、自粛と経済をまわすの境目に翻弄されることとなっている。コロナの問題が始まり九か月超で未だに自粛要請のままであり、自粛でとどめることのできる期間というのは、もうすでに過ぎていのではないかと考える。

19. 今年へ入って世界中に猛威を振るっている新型コロナウイルスだが、私はその脅威や苦しみはいまいち実感で

きていない。言い換えると、幸いながら自分の環境の中で新型コロナウイルスに感染された人、またはその人達の家や知り合いが患ったといったことは未だにいないからだ。だがテレビを付ければ、インターネットを閲覧すれば一目瞭然だ、どれだけこの未知のウイルスが如何に世界の人々に苦しみを与えていることを理解するには難儀ではない。各国で数万人の感染者やそれによる数千人の死亡者の実態が実際毎日報道されている、比較的被害が少なかった日本でも今月十二月に入ってから感染被害者が飛躍的に増加している。「コロナは風邪だ！」と訳のわからないことを言う人達も存在する、勝手に思うだけならまだしも、他人に迷惑をかける極めて身勝手な行動をとる人もいる。この時期での最低限のマナーだけは守ってもらいたい、手を洗う、マスクをつける、ソーシャルディスタンス（社会的距離）をとるなどの誰でもできるたったこれらの行動をとることでパンデミックを抑え人々の命を救うことが可能である、人類が経験した禍（わざわい）の歴史の中でこんな簡単な解決法はあったのだろうか？ふと思えば私がコロナ禍をいまだに実感できない理由は周りの人達が身勝手な行動をとらず、他人を思いやり、慈しみ、悲しみを与えないため日々努力しているからであろう。私はこの縁を大切にしたい。

20. コロナで気持ち沈んだ日々もあったがこの考え方が今の私を活かして

いるとそう思っている。現在のコロナの状況はまだまだ先の見えないゴールだ。『ダンマパダ』など哲学者、偉人の本を読み自分が直感で良いなと感じ、思えた活力になる言葉を持ち続けて、この状況をも皆さんと打破したいです。

22. 私は外出や旅行などはあまりしませんでした、一人暮らしでもないのでコロナ禍の中で不便に思ったことは正直ありませんでした。しかし、生活している中でニュースや新聞でコロナの感染者がどんどん増えていたり、コロナウイルスに感染した人を差別するような風潮があるという話を聞いて「私もコロナウイルスに感染したらどうしよう」という不安は常にありました。

23. 私のコロナ禍での苦しみは、外出するたびに感染リスクを恐れなくてはいけないことです。繁華街など、感染しやすい場所は避けていますが、移動で京都駅などを通る際はやはり不安です。しかし、苦しみばかりという訳でもなく、コロナ以前より友達や大切な人への連絡をとるようになり、外での行動も本当に必要な取捨選択する機会が増えたので、毎日の行動にメリハリがつきました。幸いなことに、私は通信教育なので自宅でも勉強に励むことができます。毎日の生活のありがたみをより感じられるようになりました。早く世界中の人々が安心して生活できる世界になってほしいと願います。

23. コロナ禍において私が一番苦しかったのは、お金のことを考えている時間です。バイトが飲食店というのもあってシフトは減ったし入る時間も減りました。掛け持ちを見つけたくても、昼間は働いているので無理だし夜のバイトなんて見つかるわけもなく普通に戻るまでは本当に不安でいっぱいでした。普通に帰った今も不安はつきせん。通勤は電車なので人がいっぱいになるのは怖いし、もし自分になったら周りの人にどれだけ迷惑がかかるかとか、学費のこととか考えると頭が痛くなります。だから早く絶対に効く特効薬ができてかかってでも大丈夫な病気になってほしいです。

24. 信頼できる人間関係、安心できる場所、なじみの店、平凡な日常の大切さを教えられた。笑うことが少なくなり、友だちやいろんな人に気軽に会えない。家族といっぱい笑えない、当たり前前生活が制限されたこと、出かけられないことで気持ちが不安定になった。

25. 医療や介護体制、当たり前前に受けられる医療が受けられない。生命の維持、命の選別、命の消失を身近に感じ不安になった。

26. あいさつや声かけが少なく、思いやりやさしさを届けられない自分がいやになった。

27. マスクをしない人や咳をする人を見かけるとつい振り向いてしまった。

そんな自分にいら立った。

28. 冬に差し掛かった辺りからコロナウイルスによる病が再び大流行している。ワクチンが諸外国で投与が始まっているが日本はもう少し投与開始までに時間が掛かりそうである。私がコロナで怖いことは、喘息を持っているのでコロナウイルスの症状が発症すれば重症になるリスクが高い事だ。私は地方に暮らしており、私の住む市町村ではコロナウイルス感染は散発的だったが、遂に同じ市町村でクラスター感染が起こった。しかもウイルスの経路は不明である。もうこのだれかが罹患していてもおかしくない。自分や他者が感染しているかもしれないと思いがら生活するのは心が重苦しい。疑うということはこれ程まで負のエネルギーであることに気付かされた。私に出来る事は手洗い・うがい、消毒、マスク着用や人との物理的距離を離すこと。はもちろんだが、必要以上に怖がらず、疑ってしまえば、必要以上の怖がらず、疑うれば良いのか、まずその苦しみの原因をみて、正しく思い考えたい。

仏教の教えは自らの心の在り方を重要にしていると捉えた。現在の状況下はその心の在り方を問われていると思いい、苦しみから解放される為に正しい怖がり方を見つけない。

29. 新型コロナウイルスは一月の国内発生から、未知のウイルスに対する恐怖や不安から日々多くの情報がか錯綜していた。緊急事態宣言が発令さ

れてから夏ごろにかけては、事実確認が難しいだけでなく、何が適切な情報なのかわからない状況が続き、インターネット上では様々な憶測や誹謗中傷の書き込みが溢れた。中でも二つ気になったことがある。ひとつは日本国内の出来事で、コロナ感染者に対する誹謗中傷の書き込み、もうひとつはアメリカトランプ大統領の中国に対する非難とそのニュースに同調するかのような日本国内の反応だ。新聞や雑誌などの紙媒体から、オンラインメディアやスマートフォンが進化により、フェイスブックやツイッターなどの SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) が広く普及し、私たち誰もが、情報を受けるだけでなく発信者になれる時代が到来している。今回の新型コロナウイルスの感染拡大に関しても、最新のニュースが一瞬にして世界中を駆け巡り、便利な時代になったことを実感させてくれる一方で、オープンで自由なはずのインターネット、SNS の情報が逆に社会を息苦しくしているように感じる。民主主義をさらに押し進めると期待されていたネットが反対に社会の混乱を招いている現実、コロナ禍で、インターネット社会の理想と現実が浮き彫りになった気がしてならない。自由であるからこそ、自分と異なる意見・宗教・民族の人々に対して互いに相手の意見を尊重し、必要な時には自己修正を加えながら、よりよい関係を構築できるような寛容な社会になることを切に願う。

30. コロナ禍で苦しいと思ふことは、常にマスクを付けていないといけないことである。息苦しいし、外した時にどこに置けばよいかわからない。外した時に人の目も気なる。さらに他の人のマスクの付け方や、付けていない人を見ると気になってしょうがない。コロナが収束したとしても、飛沫が飛ぶことが気になるこの感覚は、なくならないのではないかと思うと苦しい。

31. これまで日常的に過ごしてきた生活が、大きく変化しそれに対応と対策をするのに時間と、多くの犠牲があり今後の不安や日本の政治に目を向け現実を受けとめた一年だと思う。自粛をし最低限の外出を心がけているが、恐れながらの生活に気が引ける。離れて暮らす兄弟や、叔母の方が一を考えると、今まで以上に過ごしにくい。だが、いいこともあり、遠方からのスクーリングの交通費用がういてうれしい。

32. コロナ禍での私の苦しみは、仕事が減ってしまったことです。私の仕事は夜に働く仕事なので、休業要請をもらうに受けてしまいます。そうすると、店を早く締めなくてはいけなくなるので、売り上げもだいぶ減りました。さらに、夜のお店には行くなと限定して言われていたので、余計にお客様も来ませんでした。早く通常営業したいです。

33. 慣れない在宅勤務や気軽に外出できないという苦しみよりも、私は『マスクを付けなくてはならない』という

事に苦しんでおります。私は昔からマスクというものが大の苦手で、眼鏡は曇る、息が苦しい、肌が荒れてしまいます。また私はジョギングを習慣としていたのですが、マスク装着がマナーとなつてからはとても続けられるものではありませんでした。

34. コロナ禍の苦しみとしては、遠方に住む友人に会うことができないことや職場での歓迎会等が開催できないことにより、職員同士の距離感がどうも縮まりにくいという点である。幸い私は、家族とともに住んでいるため、帰省できず、家族に会えないという事はないが、その他の知り合いに全く会えないという事は少々辛い部分ではある。しかし、世界中の医療従事者等においては、比べ物にならないくらい過酷な環境に置かれていると考えられるので、これぐらいでは弱音は吐けないと思っている。

35. コロナが流行して個人的には苦しさを感じた事は特にありませんが、やはり社会の経済的なダメージは気にかかります。世間の経済打撃のニュースや悲しいニュースを見ると、コロナの影響が厳しく人々に降りかかっていることが悲しくなります。コロナ禍の影響によって人々の心がすさんだり、本性が見えてしまつたり人の醜い姿も垣間見たりするようになりました。また、今まで一度も病気で寝込んだことがない健康な父が、毎日コロナニュースばかり見ていたため、日に日に心が弱っ

ていく様子で、健康が唯一自慢だったのになりにきて初めて咳をし出すようになりました。そんな姿は今まで見たことなかったものでニュースやメディアの影響と言うものは絶大だなと感じたとともに、人の心をこれほどまでに病ませてしまうものかと怖くなりました。結局、コロナよりも人々の荒んだ心やメディアの影響力、そして恐怖の雰囲気を作っている社会がとて恐ろしく感じます。コロナは感染や病原菌の怖さもさる事ながら、人の心と経済に恐怖という闇を落とし込んだ、その実態が私個人的な苦しみなのかなと思います。

36. コロナ禍で一番ダメージを受けたことは、好きなアイドルのライブが全て中止になり、直接彼らと会える機会が無くなってしまったことです。どんなに悲しいことが起きたり、面倒なことが先の予定にあっても、「ライブがあるから」という一言だけでこれまで気力を持たせることができました。最近では、新型コロナウイルスの変異種が日本の空港で発見されたというニュースを聞き、ますます先のことが見通せなくなり不安になっています。今まで当たり前を楽しんでいたことを、また当たり前を楽しめる日が、少しでも近い未来に叶うことを願っています。

37. 十二月にさしかかって、再び猛威を振るいだした新型コロナウイルス感染症だが、私にとっての一番の苦しみは、大好きな旅行に行くことができないこ

とである。それは、世界中の人がそうかもしれないが、私を実家暮らしなことと、私の仕事がお年寄りと多く関わる仕事なので、家族やお年寄りに絶対にコロナウイルスをうつすわけにはいかないという思いから、旅行を自粛している。しかしながら、いつも一緒に旅行に行く友人は、東京に一人暮らしをしている。毎日多くの感染者を出している東京にいる人間とでは、どうしても考え方にギャップが生じる。旅行に行きたいと言う友人と、断る私の構図が何ヶ月も続いているのである。これでは、いつの日か誘われなくなる未来が来るような気がする。それが最大の苦しみである。

38. 私はコロナ禍で、外出する機会が減ったことが残念に思います。私はコンサートに行くことが趣味で、最後にコンサートに出かけられたのは二〇二〇年二月上旬でした。それから予定されていたコンサートはすべて延期もしくは中止になってしまい、趣味に割く時間もほとんどなくなってしまいました。一月中旬にはまたコンサートの開催が決定され喜んでいましたが、感染者数が増えたことでオンラインでのネット配信になってしまいました。私は現地で見るのが一番好きで、その後にいっしょに行った友人とコンサートの内容について話すことが好きなので、しばらくそれができていないことが寂しいと感じます。

39. このストレス社会の中で、さらにコ

ロナによってストレスが増えました。私は百貨店の販売員をしているため不特定多数の人と接触するのですが、少し自分の体調が悪いとコロナなのではないかとドキドキします。お客様から「東京から来ました」とか言われると少し不安になっていました。最近はこのコロナ禍の生活にも慣れてきたのであまり気にならないようになりましたが、現実逃避の旅行や外出も思うように出来ないのも苦しみの一つです。しかし、悪いことばかりに目を向けることなく前向きに生活したいと思います。

㉔ 十月下旬、私は一週間程度高熱を出した。何日か様子を見ていたが、一向に熱は下がらず四日目に府の相談センターに連絡したが、もう少し様子を見てほしいの一点張りだった。しかし自宅待機中に亡くなった人の話も聞いていたので殺されてたまるかと思ひ、居住地と隣の市の呼吸器科を標榜する医院に片っ端から電話をかけ、片っ端から断られた。しかし七件目で親切な開業医さんに診てもらうことができた。その医師の紹介でPCR検査も無事に受けることができた。検査は陰性で熱も程なく下がりが結果オーライであった。しかし断られ続けている間は本当に心細かった。

㉕ お腹を壊したり、アレルギーで鼻水が止まらない等の症状があった際に、トイレットペーパーやティッシュの買占めが起きた為、それらが手に入らなくなったらどうすればよいか悩んだ。

キッチンペーパーを代用できないかと考えたが、同じことを思う人々がいたのかキッチンペーパーも買占めの対象になってしまった。

㉖ 今年度入学したが、コロナの影響で大学のスクーリングや学習会がオンラインで行われるようになってしまい、学生間の交流があまり出来ずにいる。ほほ他の学生と関わらない学生生活を送ることになってしまった。分らないことを気軽に聞ける人がおらず、孤立しているように感じる。次第にモチベーションが下がってきた。

㉗ コロナ禍での一番の苦しみは一年中マスクをして生活をしないとイケないことである。仕事でもマスクをしないとイケなく、特に私はメガネをつけているのでマスクをしているとレンズが曇って仕事がしにくい。そして夏は汗がマスクの中で大量に出てきてすぐく気持ち悪かったのを覚えている。だから夏の日はずぐに汗でマスクが濡れるので、一日でマスクを三枚くらい使った。そしてその結果、マスクをたくさん買わないといけなかったので経済的にも苦しかった。

㉘ 私はコロナ禍の四月に社会人となった。しかし、思い描いていた社会人生活ではなかった。研修は中止、入社式・歓迎会もなく、同期の顔も名前も今だにわからない。そんな社会人生活を送っている。入社して一週間で在宅勤務があり、右も左もわからない状況

で仕事だけが溜まっていく。相談したくても、気軽に声のかけられる人がいない。働いて、お金をいただいても遊んで使える機会がない。ストレスを溜めるだけの、ただ過ぎていく日々に向うために生きているのかを毎日考えさせられた。生きることを止めることも考えた。暗く悲しいニュースがさらに私を追い詰めた。楽になりたい。その一心で何度も道を踏み外しそうになった。職場からの帰り道、寝る前、ベランダで、運転中に、ふとした瞬間目から涙が溢れてくる。毎日がいやで嫌で仕方がなかった。しかし、決して悲しいことばかりではない。私には家族がいる。友もいる。可愛い可愛い猫もいる。当たり前前の幸せに気づかされた一年だった。人の暖かさに触れ、再認識できた一年であった。

45. コロナ禍での苦しみということを考えるとき、もちろん、自由に行きたいときに行きたいところに行くことができない不自由さ、気軽に人と関わることができない不自由さなどがありますが、医療従事者や介護従事者など他人のために自分を犠牲にしてコロナと戦う人たちがおかれている状況に思いをはせれば、自分たちのことは、とても苦しみとはいえないものだと思います。

46. 病気で入院という人生初めての体験もした。この授業のブツダの言葉に救われることも何度もあった。また、ぐさつと胸に突き刺さる言葉もあった。

言葉では理解したつもりでもなかなか実践していくことが難しい。現在は、これまで仕事で取り組んできたことを、仕事とは別の場所で楽しく取り組めるように準備している。ブツダの言葉からすると、醜い執着のようにも思える。なるべく執着という表現に合わないように、中道にできるようフランクに取り組んでいけると良いと思うようになった。この佛教大学での学習も一つの備えである。社会の変化で生きる場所がなくならないよう、知識や資格を身につけていこうと考えたのもあって入学した。人生とは何かと幾度も考えた一年になった。後から考えればきっと有意義な一年になったと思いたい。世の中にはもっと悲惨な思いをしている人がたくさんいる。悪い状況も長続きしないと信じて頑張っていきたい。

47. 実はさしせまった苦しみは特に感じることなく生活ができていると思っています。もちろん好きだった旅行ができず、友人と楽しく食べたり飲んだりすることはできていません。しかし、それがつらいと感じることがないのは、普段からの人つきあい淡泊であるからだと思います。ただ周りにいる多くの人がつらい状況であることを語るのを聞くのはいやです。苦しいと感じている人が多くいることを、知るのがわたしの苦しみといえると考えます。これは今現在のことだけのことではない、苦しみの状態の人はいついかなる時にも存在するということを知ることができました。また、自分の苦しみに鈍

感になつていゝることに気づく必要がありません。

あ.世間ではコロナ禍と言われているが、私にはその苦しみがいささかピンときません。マスクは離せない、遠方の家族とは会うことができないなど不自由な面はありますが、苦と言えるほどのものはありません。確かに、コロナに感染した人や家族やその周りの人々、また経済が回らないために自営業の人など苦勞をしている人たちはたくさんおられると思います。しかし、私は幸いにも自分の周囲にコロナに感染した人はおらず、また仕事もさほど影響は受けていません。さらに言えば、昔流行ったペストやチフス、スペイン風邪等々、また今は戦時下という混乱の時代でもなく、それに比べればコロナなどそれほど苦しみとは思えません。逆にこれまでにライフスタイルを変化させる機会かもしれないとも思います。全くもつてよい時代によいめぐり合わせで生まれたものだと感じています。もし自分や家族がコロナに罹患したとすれば…、それも全て縁起の結果として受け入れて諦めるつもりです。そして、病気が治癒するか否かはみ仏に委ねるだけである…、と言い切れるようになりたいものです。

あ.現在の誰もが今まで体験したことがない見えない敵と戦わざるを得ないことと考える。具体的には、症状なしの感染者がいて、それらからも感染し、感染した場合に、最悪、死ぬという恐

怖からの苦しみである。苦しみの原因は新型コロナウイルスであることが分かっている。自分では、いわゆる三密を避け、手洗い、マスクをするなどの予防策を講じるしかない。しかし、それらでは完全にコントロールできないので、大げさに言えばブツダが目指した、苦からの解放が容易にでない状況にある。更に、このようなコロナ禍では様々な理由でストレスを抱える等の二次的被害が出て、ますます穏やかな気分では居られないということである。こういう時こそ授業で学んだ『ダンマパダ』を読み、ブツダの言葉によって少しでも心が安まることになれば良いと思う限りである。

あ.コロナ禍ではあまり苦しみはありませんでした。強いて言えば、ニュースが毎日コロナコロナでちよつと話題にうんざりしたり、社会の〇〇警察みたいな姿に人間の嫌な部分をいちいちあぶりだしてクローズアップして伝えられているようで嫌だなどは感じることはありました。個人的にはコロナ前まで全国を飛び回っていたので、オンラインが中心となり生活は大きく変わりました。しかし、それによって家族とともにいる時間が増えて、思った以上に楽しく快適でよく笑っていたように思います。自分でも心境の変化に驚いておりません。オンラインによつての仕事は、以前からニーズはあつてもやっぱり対面じゃなければ伝わらないだろうなどのこだわりがあつたのですが、やってみると普段家を空けられない子供

を持つお母さんも喜んで参加できている姿や、私自身もオンラインの仕事が始まるちよつと前まで家事ができたり、移動にお金も時間もかからないので自由な時間ができ、とても多くの利点があります。結果的にやってよかったと感じていますが、きっとコロナがなければこういった自分の思い込みやこだわりの部分になかなか踏み出せなかったと感じておりますので、不謹慎かもしれませんが、この時代を体験し、この時間と出来事に感謝しております。

【小結 今後への展望】

大学教育は、「建造物」の中の、「大教室」で、「受ける、授ける」ものではなくなりつつあるのかもしれない。いわゆる「マスプロ教育」への反省ではなく、コロナ禍を通じた変化である。

オンラインの発達が挙げられるかと思う。

特にその強い影響下にある青年にとつて、いつでも、どこでも、誰でもつながれる「オンライン」、それへの「違和感」は急速になくなりつつあるようだ。

上記の「苦」に関する感想文を通して、理解できた点、そしてその理解を通じた「今後の寺院活動」への展望について、論じてみたい。

ここで以上の諸点を踏まえ、「今後の寺院活動」に視点を移してみよう。

コロナ禍での必要に迫られたオンライン授業の故か、「オンライン」

現在、寺院と関係を結ぶ多くの檀信徒方は、「対面での仏事」を大切にされている。

に対する「不便さ」「物足りなさ」は感じていても、学生の多くはそこに「違和感」を感じていない点が明らかになった。

しかし、今後は、「何らかの条件つき」で、「オンラインでの仏事」に「違和感を持たないと世代」へと交代していく点が、予想される。

確かに、ネット環境の不整備、パソコンの技術的問題、眼の疲れ、気軽な質問の困難さ、課題の多さ、コミュニケーション不足に代表される、多くの「不便さ」「物足りなさ」が紙面にはあふれてはいる。

オンライン授業を経験した世代が仏事を行う時代になると、「対面・建造物」の仏教と、「オンライン・ヴァーチャル空間」の仏教とが、より一層、併存・混在する状況が見られることになろう。

しかし、その一方で、校内での対面授業の「必然性」を訴える意見や、オンライン授業自体に対する「違和感」は、ほぼ確認できなかったのである。

しかしその場合、あまりに「オンライン・ヴァーチャル空間」に特化しすぎれば、ありがたみの無い、技術の世界に陥りかねない。それでは、かえって御仏の心から遠ざかるものとなろう。

私見ではあるが、この背景として、昨今の「双方向的」コミュニケーション

大切な点は、いかに傾聴し、相手

に寄り添えるか。悲しみを共有できるか。共にお念仏をお称えできるか。対面であっても、オンラインであっても、その本質に変わりはない。

「仏教大学通信教育50」に次のような感想が見られた。

「コロナがなければこういった自分の思い込みやこだわりの部分になかなか踏み出せなかったと感じておりますので、不謹慎かもしれませんがこの時代を体験し、この時間と出来事に感謝しております。」

大変な状況ではあるが、変えられない点を嘆くのではなく、変えられる点、変えられた点に感謝をされた姿勢に触れて、「**変化を恐れる我が身**」に、はっと気付いた瞬間であった。